

## 和泉式部日記の暦日表現——本文異同の評価——

半沢幹一

### 1

和泉式部日記の伝本は、三条西家本、寛元本、応永本、混成本の四系統に分けられ、そのうち三条西家本が最古・最善本とみなされている。通称の「和泉式部日記」はこの三条西家本の表題による。他系統本はすべて「和泉式部物語」となっている。

伝本の系統分類の基本は、本文の異同にある。本文の異同は書写の際に生じるものであり、それが作爲的な場合もあれば非作爲的な場合もある。その区別自体、難しいが、後者なら単なる誤写として、他系統本によって校訂されるのに対して、前者の場合は書写者の本文批判つまり文脈解釈によって左右される。それは必ずしも想定される一つの祖本との関係からではないので、その可否の評価が難しい。和泉式部日記において、その傾向は三条西家本に著しい。表題が「物語」ではなく、唯一「日記」であることも、それに関わる。

小稿は、その文脈解釈がどのようなものか、テキスト内に見られる暦日表現を対象として、検討する。テキストには、宮内庁書陵部蔵『和泉式部日記』（三条西家旧蔵本）を底本とする、新編日本古典文学全集本を用いる。

まずは、和泉式部日記の、いわゆる地の文において暦日表現として認められる表現を、テキストの表記によって、登場順に掲げる（該当表現に傍線を付す）。計二三箇所（二五例）ある。

- 〔1〕（略）四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。
- 〔2〕晦の日、女、ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日もすぎなば と聞こえさせたれど、（略）。
- 〔3〕五月五日になりぬ。
- 〔4〕かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すぎごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず。
- 〔5〕晦日がたに、「いとおほつかなくなりけるを、などかときどきは。人数におほさぬなめり」とあれば、（略）
- 〔6〕かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、詣でぬ。
- 〔7〕晦日がたに、風いたく吹きて、野分だちて雨など降るに、つねよりももの心細くてながむるほどに、御文あり。
- 〔8〕九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、（略）。
- 〔9〕かくて、晦日がたにぞ御文ある。
- 〔10〕かくいふほどに十月にもなりぬ。十月十日ほどにおはしたり。
- 〔11〕十一月朔日ごろ、雪のいたく降る日、（略）。
- 〔12〕（略）十二月十八日、月いとほどよきほどなるに、おはしましたり。

〔13〕年かへりて正月一日、院の拝礼に、殿ばら数をつくして参りたまへり。

なお、〔10〕の「十月」は底本では「一月」になっているのを、他系統本により校訂されたものである。

### 3

まず、この一三個所全体に関して、次の三点を指摘しておく。

第一に、この作品はある年の四月から翌年の一月までの出来事を描いたものであるが、各月のうち、〔3〕と〔4〕の間に入るはずの、六月だけが暦日表現を欠いている。

たまたまの結果かもしれないが、六月は故宮の祥月命日があり、それなりの公的な法要が行われたはずである。それにまったく触れられていないところには、あえてそれを避け、六月を意識させようとしなかった意図がうかがえる。第二に、〔2〕〔5〕〔7〕〔9〕では、月の表示がなく、「晦（日）」（＝月末日）とのみ記されているが、それぞれに先行する日付表現から、四月、七月、八月、九月の末日と特定される。ということは、この四つの月は二回ずつ暦日表現があるということである。

また、月末日が四例あるのに対して、月初日の暦日表現があるのは、〔11〕と〔13〕の二例である。合わせて六例となり、暦日表現の半分近くを占める。これにより、月替わりの前後がとくに印象付けられることになる。

第三に、暦日表現が文頭に位置するのは、〔2〕〔3〕〔5〕〔7〕〔8〕〔11〕の六例、それに準じるのが、〔4〕〔6〕〔9〕〔10〕〔13〕の五例、合わせると二五例中の二二例も該当する。〔12〕の「十二月十八日」は、それを含む一文に

において、先行表現が一一行にも及んでいて、例外に属する。

これらが示唆するのは、月単位ではあるものの、冒頭の暦日表示を基本とする日記の体裁に近いということである。

## 4

参考までに、暦日表現相互の日数間隔を示すと、次のようになる。なお、一ヶ月を二八日とし、「あまり」や「かた」「ころ」などの語が付されていても、暦日そのものによって計算する。どのみち、あくまでも目安である。

[1] ∼ [2] ∴ 一八日、[2] ∼ [3] ∴ 五日、[3] ∼ [4] ∴ 三〇日、[4] ∼ [5] ∴ 二二日、  
[5] ∼ [6] ∴ 一日、[6] ∼ [7] ∴ 二七日、[7] ∼ [8] ∴ 二〇日、[8] ∼ [9] ∴ 一〇日、  
[9] ∼ [10] ∴ 一〇日、[10] ∼ [11] ∴ 一九日、[11] ∼ [12] ∴ 四五日、[12] ∼ [13] ∴ 一一日

最短が [5] ∼ [6] の一日、最長が [11] ∼ [12] の四五日、他は一桁台の日数が一個所 ([2] ∼ [3])、一〇日台が四個所 ([1] ∼ [2]、[8] ∼ [9]、[9] ∼ [10]、[10] ∼ [11])、二〇日台が三個所 ([4] ∼ [5]、[6] ∼ [7]、[7] ∼ [8])、三〇日台が一個所 ([3] ∼ [4]) 見られ、全体として、一日から四五日までの幅があつて、一律の規則的な間隔にはなっていない。

言うまでもなく、具体的な暦日表現があるのは、その月あるいは日までも含め、それを明示するだけの理由があるからである。その理由とは、その月あるいはその日の出来事として顕著なことがあったということに他ならず、間隔

の長短はその有無や多寡の結果にすぎない。

## 5

では、暦日表現ごとに、どれだけの分量の記述があるかを、テキストの行数によって示すと、次のとおりである。

- 〔1〕 一一〇行（二八日）、〔2〕 七一行（五日）、〔3〕 一七五行（三〇日）、〔4〕 一三行（二一日）、
- 〔5〕 二三行（一日）、〔6〕 五二行（二七日）、〔7〕 九行（二〇日）、〔8〕 七一行（一〇日）、
- 〔9〕 一九行（一〇日）、〔10〕 三三二行（一九日）、〔11〕 八五行（四五日）、〔12〕 五六行（二一日）、
- 〔13〕 五二行

最多は〔10〕の三三二行、次いで〔3〕の一七五行、そして〔1〕の一一〇行と、一〇〇行以上が三個所ある。対して、最少は〔7〕の九行、次いで〔4〕の一三行、〔9〕の一九行である。全体平均は八二行であるから、バラつきは大きい。

和泉式部日記には、毎日の記述があるわけではなく、それぞれの期間に取り上げられた出来事の数およびその詳細さ加減によるが、この分量と間隔日数との関係を見ると、最短の〔5〕では、一日に二二行も費やされているのに対して、最長の〔11〕では、四五日に八五行しか当てられていないことになり、全体として比率的にはかなりの粗密がある。

これに大きく関わっていると考えられるのが、掲出歌である。全部で一四四首ある。暦日表現を単位として、それぞれの歌数を多い順に示すと、次のとおりである。

- 四八首::〔10〕（○・一四／行、三三二行）
- 二〇首::〔3〕（○・一一／行、一七五行）
- 一九首::〔11〕（○・二三／行、八五行）
- 一三首::〔1〕（○・一二／行、一一〇行）・〔2〕（○・一八／行、七二行）
- 一〇首::〔8〕（○・一四／行、七一行）
- 九首::〔6〕（○・一八／行、五一行）
- 四首::〔5〕（○・一八／行、二二行）
- 三首::〔9〕（○・一六／行、一九行）
- 二首::〔4〕（○・一五／行、一三行）・〔7〕（○・二二／行、九行）・〔12〕（○・〇四／行、五六行）
- 〇首::〔13〕（五二行）

全体的な特徴として、次の四点が挙げられよう。

第一に、最後の〔13〕を除き、それ以外ではすべて歌が見られるという点である。行数単位での歌の出現率を見る

と、○・一八が中央値であり、これは五・五行に一回は、歌が現われるということである。

第二に、最多の歌数を含むのは〔10〕であり、全歌数の三分の一以上を占めるという点である。〔10〕は最多行数でもあったが、行数あたりの歌の出現率を見ると、平均的である。

第三に、出現率では、〔7〕と〔11〕が、○・二を越えて、最高であるという点である。〔7〕のほうは、わずか二首ではあるものの、行数が九行しかなく、八月「晦日がた」の一日だけの、宮と女の歌の贈答に関することに終始している。〔11〕は一九首もあり、行数もそれなりにあつて、最多歌数の〔10〕に続き、〔10〕の倍以上の日数においてはあつたが、宮と女の贈答が頻繁に行われた結果である。

第四に、日記最後のほうには歌がほとんど現われないという点である。〔12〕には二首あるものの、行数から見れば、出現頻度はいちじるしく低く、〔13〕に至っては歌はまったく現われない。これは、女が宮邸入りしてから、独詠はともかく、宮との歌の贈答が不要になったからであろう。

## 7

さて、以上をふまえ、明示された暦日表現に関して、伝本系統による異同の如何を確認する。資料としては、岡田貴憲・松本裕喜『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成（勉誠出版、二〇一七年）を用いる。

まず、系統による異同が認められないのは、〔2〕〔4〕〔5〕〔6〕〔7〕〔9〕〔11〕〔12〕〔13〕の一〇例であり、これらは検討対象から外れる。よつて、先に触れた〔10〕を含め、残り五例が問題となる。

このうち、〔1〕の「四月十余日」は、応永本ではただ「四月」とあり、日にちを欠く。〔3〕の「五月五日」は、

三条西家本以外はすべて「五月六日」であり、一日ずれている。「(8)」の「九月二十日あまり」も、三条西家本以外は「九月十日」となっていて、こちらは一〇日間の隔たりがある。「(10)」は、三条西家本のみが「一月」、それ以外は「十月」であり、続く「十月十日」は三条西家本以外、「十日」のみである。

これらの異同に関して、本文としての先後や正誤の関係からではなく、対等な本文として、それぞれがどのような文脈を構成するかについて、確認してみる。

## 8

まず「(1)」であるが、記述された出来事に対して、暦日表現が付されるか否かは、その特定に必然性があるか否かに関わる。

「(1)」は、「和泉式部日記」の冒頭文内にある。その一文を掲げる。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。

テキストの注には「四月の中の酉の日には賀茂祭もあり、人々の心は浮き立つのと暗に対照させているか」とあるが、この文脈からは、「四月十余日」という範囲での特定の日にある、その祭事に合わせたとは考えがたい。

たしかに、続く第二文には、「築土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに」



のように、他の人々との対照は認められるものの、それが賀茂祭に結び付けられるほどの要素は認めがたいし、結び付けようと思えば、四月に入っただけでも可能であろう。

旧暦の四月は夏であるから、木の種類を問わずしだいに緑陰が濃くなる、つまり「木の下くらがりもてゆく」というのは、自然の推移である。しかし、それは四月に入っただけというわけではなく、それ以前からの漸次的な推移であって、「十余日」になったから、急に「木の下くらがりもてゆく」わけではない。すなわち、それは応永本のように、「四月にもなりぬれば」であっても成り立つことであり、それに女が気付くことに関してだけなら、「十余日」でなければならない必然性には乏しい。

ただし、考慮されることがあるとしたら、為尊親王が亡くなったのが前年の六月「十三日」であるという点である。私的な服喪とはいえ、その後の月命日には、女は特別な思いを抱いたであろう。とすれば、ちょうど一〇カ月を経過した命日にあたる日を、「四月十余日」のように、あえてほかして表現したのではあるまいか。

このほかしには、もう一つの意図が読み取れる。それは他ならぬ、帥宮との出会いであり、その日を忘れてしまったとは考えがたい。むしろ、帥宮は兄の月命日に合わせ、それを口実として女に近づいたにちがいない。

とすれば、応永本以外の「十余日」という本文のほうにこそ、物語的な必然性があるといえよう。

## 9

〔3〕は「五日」か「六日」という、一日違いの異同である。

その前に、〔2〕の四月「晦日の日」からの時間経過に関する記述を確認すると、「二三日ありて」、「またの日」、「三

日ばかりありて、「おぼしつむほどに、いとほるかなり」、「いとつれづれなる日ごろ」などが見られる。

すでに指摘があるように、これから少なめに見積もっても、四月の末日から一週間以上は経っていることになる。その点では、「五日」であつても「六日」であつても、日数が合わない点では同じである。それを承知のうえで、このようなズレが生じたとすれば、すでに指摘があるごとく、単純な日数の矛盾ではなく、物理的な時間に対する心理的な時間であろう。いみじくも、「いとはるかなり」という、一種誇張的な表現が象徴するのは、再会を期す宮あるいは女にとっては、たとえ一日であろうと何日にも感じられたということであり、字義どおりの時間経過を示すものではない。

## 10

とはいえ、それならば、五月の何日であれ、臚化表現にすることもありえたにもかかわらず、「五日」あるいは「六日」と特定したのはなぜか。それはその日に特別な意味を見出したからに他ならない。

五月五日と言えば、端午の節句である。しかし、この日の条には節句にまつわることは一切示されていない。また、当日には、宮と女に歌のやりとりはあったものの、宮の来訪もない。つまり、少なくとも「五月五日」であったことが記憶に止まるほどのことは起きず、その以前と同様の状態が続くばかりである。

なお、この次に見られる暦日表現は、「4」の七月七日である。この日も節句であるが、こちらには、七夕にちなんで「すぎごとどもする人のもとより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず」と記されているので、その暦日明示には必然性がある。

いっぽう、その翌日の「六日」ということで想起されるのは、五月五日との関係から、「六日のあやめ、十日の菊」という、時機を逸して役に立たないことを表わす諺である。

じつは、直前の四月末日の条に、次のような女の歌がある。

折すぎてさてもこそやめさみだれて今宵あやめの根をやかけまし

初句の「折」について、テキストではそれがどのタイミングなのか説明されていないが、清水好子『和泉式部』（集英社、一九八五年）は、「物語でのために精進潔斎中の人は、節句の営みにも加わらない習慣であった。五月五日、当時の人びとは災厄を避けるため、菖蒲を軒先に葺いたり、袖につけたりし、その長い根を競って贈答したりする。ここは「五月雨れ」とあり「あやめの根を掛ける」とあるので、五月の節句の前日の歌であろう」と推測する。また、岩佐美代子『和泉式部日記注釈』（笠間書院、二〇一三年）は、この歌が詠まれたのが「五月雨の降る五月五日の今宵」とみなしている。

歌に菖蒲を持ち込むのは、それにちなんだタイミングつまり五月五日あるいはその前後日がふさわしいと考えられるので、「折」をその日あたりとする、これらの解釈はもっともである。しかし、そうすると、この歌を女が宮に贈ってから、「二三日ばかりありて」をはじめ、先に引用したような、時間経過を示す表現がいくつが続いたうえで、五月五日あるいは六日という日を明示したとすると、日数のズレをより顕在化させてしまうことになる。これが単なる錯誤でないとすれば、なぜこのように日を持定しなければならなかったのか。

三条西家本のみの「五月五日」は、次に出て来る暦日表現である「七月七日」と合わせ、節句日ということで記すに価すると思ったという以外には推測しがたい。

対するに、三条西家本以外の「五月六日」には、二つの理由が想定される。

一つは、五月六日には、長雨が上がったのではないかということである。続く文には「雨なほやまず」とあるものの、「昼つきた、川の水まさりたりとて人々見る。宮もご覧じて」とあり、さらに宮が女のところへ「おはしまさむとおぼしめして」とあるからである。

ただし、すでに指摘があるように、史実に照らせば、想定年の鴨川洪水は五月二〇日にかけてのようであるから、どのみちそれと比定して、日にちのズレを問題にしても意味がない。

もう一つは、女の「折すぎて」歌は、まさにこの日に詠まれたのではないかということである。かねてより、この歌の不自然さや難解さが指摘されてきたが、それはその日にちがそれ以前に変更されたせいであろう。しかし、その変更結果が妥当ともみなしがたい。現行本文の位置にあつて、この歌は「さていつか帰りたまふべからむ」という宮の問いに答えるものになっていないし、五月ならまだしも、四月中ならば、「あやめ」を持ち出すのは適切でないからである。

五月に入ってから、「雨のつれづれはいかに」という言葉とともに届いた宮の歌に対して、「折を過ごしたまはぬををかしと思ふ」女であるから、五月五日の節句という、特段の折に何の挨拶もないことを気にかけていたはずであり、だからこそ、その暦日を明記する必要性があつたのである。そして、その翌日の「今宵の雨の音は、おどろおどろし

かりつるを」という宮の文であるから、それに対し「今宵」という同語を用いつつ、「折すぎて」で、五月五日を過ぎたことを表わし、「乱れ」も掛けた「さみだれて」によって、降雨の状況を示し、加えて「あやめ」という節物を詠み込み、全体として、宮に対する恨みめいた氣持を表明しようとしたとすれば、この歌はいかにも似つかわしい。

## 12

では、この歌が当該日より前に置かれたのは、なぜか。

この条の次に暦日表現が見られるのが七月七日であり、暦日表現のない六月を含んで、日数間隔としては六〇日以上と、もつとも長い。その間に交わされた、たびたびの宮と女の歌には、二人の氣持が徐々に親密になってゆくプロセスが示されている。そのプロセスの始発時において、返歌もされなかったような、恨みめいた「折すぎて」歌を据えるのは、あくまでも物語上の展開としては、無理があつたからではないか。それならばむしろ、まだ二人に行き違いが見られる段階に置くほうがマシであろう。その措置の結果として、解釈上、この歌は不自然・難解という評を受けてしまうことになったのであるが、捨てるには惜しいという判断が働いたのかもしれない。

## 13

次に〔8〕であるが、暦日表現を含む、長めの一文全体をまず示す。

九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」とおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、女、目をさまして、よろづ思ひつづけ伏したるほどなりけり。

この「九月二十日」が三条西家本以外では「九月十日」になっているということの問題になるのは、「有明の月」との関係である。

「有明の月」とは、夜明け頃にまだ空に見える月のことであり、月齢により月の出の時刻の変化によって、普通は満月以降、新月になるまで、夜中から明け方にかけて出る月が相当する。ちなみに、陰暦では月齢と暦が一致するので、初日が「ついたち（月立ち）」、末日が「つごもり（月籠り）」と呼ばれ、その中間の一四、五日あたりが満月である。

とすると、「九月二十日」なら、満月後なので有明の月が見られるのは当たり前であるが、「九月十日」では、まだ見られない。つまり、「九月十日あまりばかりの有明の月」というのは、事実上、ありえないことになるはずである。この日の条には、女に会えず虚しく帰る宮から「秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな」という歌が贈られ、それを読んだ女は「なほ折ふしは過ぐしたまはずかし。げにあはれなりつる空のけしきを見たまひける」と思うのであるから、その月を「有明の月」とみなしたという点は動くまい。

それでは、「九月十日」というのは単なるミスなのであるうか。

三条西家本以外の系統本は近代以前には広く流布していたと考えられる。宮の「秋の夜の」歌は、新古今集に収められているが（巻一三・恋三・一一六六番、太宰帥敦道親王）、その詞書は次のように「九月十日あまり」となっている（新編国歌大観本による）。

九月十日あまり、夜ふけて、いづみしきぶがかどをたたかせ侍りけるに、ききつけざりければ、あしたにつかはしける

これは三条西家本以外を元にして付された詞書であろうから、その原文をあくまでも尊重して、そのままにしたのかもしれない。ただ、これを含め、三条西家本以外で、書写に関わったであろう多くの人々が、一般に「有明の月」と呼ばれる月の時期を知らなかったとは、きわめて考えにくい。それは祖本にまで遡っても言えることである。あえてもともと「二十日」だったのを「十日」に書き換え、それが維持されるというのも、やはり考えがたかろう。

とすれば、あらためて問い直すべきは、「有明の月」のほうである。

まず押さえておきたいのは、当日、宮が目を覚まし女を訪れようと思ったのは、何時ごろかという点である。どんなに遅くとも「有明」つまり明け方ということはありえない。いっぽう、男が女を訪ねる通常の時間帯である夕方でもあるまい。

考えられるのは、月が煌々と照っている真夜中であって、「有明」という時間帯ではない。宮の「秋の夜の」歌にある「有明の月の入るまでに」は帰る時間帯のことである。

先に述べたように、「有明の月」は満月以降の月のことを表わすとされるが、そもそも明け方まで見られるということに重点を置いた命名であるから、その点をふまえれば、満月でさえ月の入りは午前六時なのであり、それも「有明の月」と言えなくもないのである。当該の暦日表現も、「九月十日」その日ではなく「九月十日あまり」であって、その「あまり」という含みは、明け方近くに見られる月を可能にしているのである。

その意味では、月齢として二十日過ぎての「有明の月」は自明なのであるから、当該部分は単なる「月」だけでもよかったはずであり、むしろ「二十日あまりばかりの有明の月」というのは重複的な表現であって、「十日あまりばかりの有明の月」と表現するほうが、暦日を明示する意味があったといえる。

しかし、より重く見たいのは、「有明の月」という歌語的表現のもつ、男女間の機微に関わるイメージである。宮の「秋の夜の」歌はもとより、その後に続く、女の手習の中にも出て来る「有明の月」はまさにそのイメージを喚起させる。とすれば、それを生かすために、この条の冒頭文の「有明の月」は、その時間帯から考えれば不自然であるにもかかわらず、「有明の」を付した、それらの歌からの適及的な措辞であったと考えられる。



最後の「10」は、まずは「一月」か「十月」とかという違いである。この「一月」が月名を示すとすれば、すぐ次に続く「十月十日」があるので、明らかな過誤であり、その後の展開を考えても、「十月十日」のほうが誤りということとはありえない。三条西家本を底本とするテキストは原文が「一月」であるにもかかわらず、「十月」と校訂したのは、それを月名の誤写とみなしたからであろう。

和泉式部日記における月日の表記はほとんどが漢字表記であるから、月の場合、それが月名であるか期間であるかが判別しがたい。つまり、「一月」という漢字表記は、それ単独ならば、「むつき」とも「ひとつき」とも読めるのである。「むつき」でないとすれば、期間を表わす「ひとつき」でしかない。

問題があるとすれば、いつを起点としてのひと月か、である。

この直前の暦日表現は「9」の九月の「晦日」である。「十月十日」は、九月末日からでは、十日間であって、それをひと月とはとても言えない。その前の「九月二十日あまり」であつとしても、まだ足りない。その点で、三条西家本の暦日表現相互は不整合である。

それに対して、三条西家本以外は、「十月」であるから、続く「十日」とも、全体の時期設定とも矛盾しない。「十月」という月名を繰り返さないのは、「4」の「かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すぎごとどもする人のものより、織女、彦星といふことどもあまたあれど、目も立たず」と同様である。

ただし、注意したいのは、いきなり「十月十日」とはせず、「十月」と「十日」を分けている点である。

ここで、やや脇にそれるが、暦日表現に先行する指示表現に注目してみたい。

一三個所のうち、暦日表現のある一文中で指示表現が先行するのは、次の四例である（該当部分に波線を付す）。

〔4〕 かくいふほどに、七月になりぬ。

〔6〕 かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、詣でぬ。

〔9〕 かくて、晦日がたにぞ御文ある。

〔10〕 かくいふほどに十月にもなりぬ。

これらに、〔11〕の「十一月朔日ごろ」で始まる一文に先行する「かく言ふほどに」、年ものこりなければ、春つかたと思ふ」も加えると、五例になる。

これらの「かく」あるいは「かかる」という指示表現は、その指示する先行文脈の範囲、具体的には時間幅が広ければ広いほど、指示の実質性を失って、接続表現としての機能が前景化する。逆に、狭ければ指示性が濃厚となる。右の五例のうち、直前の暦日表現がその前日となるのが、〔6〕と当該の〔10〕の二例であり、他は一〇日以上の間隔がある。

〔6〕の「かかるほどに八月になりぬれば」を八月初日、〔5〕の七月の「晦日がた」を七月末日、同様に、〔10〕の「かくいふほどに十月にもなりぬ」を一〇月初日、〔9〕の九月の「晦日がた」を九月末日とみなせば、どちらも

一日違いである。つまり、「6」の「かかるほどに」も、「10」の「かくいふほどに」も、その前日の出来事を指示しているということである。とくに「10」の場合、「いふ」という動詞も形式的な用法ではなく、前日の宮との文のやりとりをふまえているとすれば、実質的な用法に近い。

18

このような指示表現をふまえると、「10」の「かくいふほどに十月にもなりぬ」という一文からは、こんなふうな文のやりとりだけでもう月が替わり、一〇月になってしまったという感慨が読み取れる。だからこそ「十月にもなりぬ」なのである。そうして、やっと「十日」ほど経つてという点を極立たせて、宮の来訪があったということを示したと見られる。

以上から、それぞれ異なる意味合いをもつゆえに、「かくいふほどに十月十日ほどにおはしたり」とは表現せず、別文にしたのであろう。

19

以上、伝本によって本文に異同の見られる暦日表現五例について、確認してきたが、あらためて和泉式部日記における暦日表現そのものの意味を考えてみる。

暦日を記すという点ですぐに想起されるのは日記である。現代の市販されている日記帳においても、区分けされた

各欄にはまず月日が示されている。まさに「日記」の日記たるゆえんであり、それは実用的か否か、公的か私的かを問わない。そのうえで、各日の欄に、その日の出来事の事実が、客観的か主観的かはともかく、記される。

和泉式部日記は、そのような体裁・内容になっていることから、「日記」と称されたわけではない。そもそも、いわゆる日記として書かれたものでもない。暦日表現があるとはいえ、それは一〇カ月（廿八〇日）のうちの二三個所にすぎない。それらの暦日表現を先立てた記述からは、日記の体裁に近い、と先に記したものの、それをもつて作品全体に及ぼすのには無理がある。

とすれば、そのような、和泉式部日記に見られる暦日表現は、強度の如何はあるにせよ、その暦日とともに印象・記憶に残った出来事を示すために示されたと考えられる。ただし、それは事実の記録としてではなく、あくまでも記憶・回想の物語としてである。間違つて別の月日と思ひ込むことも十分にありえるし、執筆する際に、展開上の都合から、月日を入れ替えるということもあつたのではないかと見られる。かりに時間経過や事実と齟齬することがあつたとしても、それは作品展開上の必然として認められるべきであろう。

## 20

このような見方に立つて、異同の見られた四個所の暦日表現を見直してみると、次のように整理される。

〔1〕については、故宮の月命日かつ帥宮との出会い日であることを喚起させるという点において、ただ「四月」と記す応永本より、三条西家本を含む他の三系統本のように「四月十余日」とするほうが、必然性が高いといえる。

〔3〕については、三条西家本の「五月五日」よりも、それ以外の「五月六日」のほうが、前後の文脈展開からは、

その日であると特定することの意味があると見られる。

〔8〕については、三条西家本の「九月二十日あまり」よりも、それ以外の「九月十日あまり」のほうが、「有明の月」を持ち出すこととの関係において、わざわざそのように断ることの動機が明確であろう。

〔10〕については、三条西家本の「一月」を「ひとつき」と、期間を表わすものとしてはありえるものの、その指定期間には食い違いが認められるのに対して、それ以外の「十月」は月替わりを強く意識させるとともに、帥宮の来訪日である「十日」とは別にすることによって、それぞれの意図がより鮮明になると捉えられる。

これらからは、「物語」という表題をもつ系統本の暦日表現のほうが、「日記」と称する三条西家本に比べて、物語としての展開を意味付けるものになっているといえるのではあるまいか。

もとより、このことが作品全体にも及ぶということまで主張するものではない。暦日表現に関しても、他の九箇所は本文が一致しているのだから、暦日表現に限っても、大勢としては伝本による違いはないのである。ただし、冒頭に記したように、暦日表現の本文異同が非作為ではなく、作為の結果とするならば、その意図のありようを探ることは、作品の成り立ちを考えるうえで、重要な手掛かりになると考えられる。

その手掛かりが、本文全体の異同とどのようにリンクするか、それが次の課題である。